

ヘルダーリンの讃歌「ライン」について

平野七濤*

(平成18年10月10日受付；平成18年11月9日受理)

要 旨

讃歌「ライン」はヘルダーリンがスイスのハウプトヴィルに滞在していた1801年に構想された。そこには、当地でのヘルダーリンのアルプス体験が色濃く反映されて、小品「束縛された河」と同じく、アルプス山中のライン水源の地、ゴッタルト山塊を激流をなして走る前ライン、アルプスラインの雄々しい姿が描かれている。しかし「ライン」は、この小品とは異なり、この河がやがて山岳地帯を離れて、ヨーロッパ中央部、すなわちドイツの広い平原地帯を静かに、そして堂々と王者のように流れるにいたる姿も克明に描いている大作である。

讃歌「ライン」は、しかしながら、このような「ラインの物語」のみをそのテーマとしているのではなく、この物語との連想においてさまざまな事柄についても語られる。本論においては、「ライン」を、この物語を中心に、さらに「詩人の存在」、そして「神々と人間の融和」のテーマにおいて捉え、考察する。

KEY WORDS

Hölderlin	ヘルダーリン	Dichter	詩人
Der Rhein	ライン河	Götter	神々
Halbgott	半神	Menschen	人々

1

讃歌「ライン」は、その長大な形式を見事に生かし切った内容の深さと多様さにおいて、ヘルダーリンの数多い河をうたった詩の中でも圧巻である。この作品の最初の部分に登場するライン河は、詩人の故郷シュヴァーベンのなだらかな地を流れるネッカル河やマイン河と違って、アルプス山中の水源からこの山岳地帯の峡谷を激流をなして流れる前ラインやアルプスラインである。「ネッカル河」や「マイン河」の河が人間の生をやさしく包み、育むものとして描かれているに対し、「ライン」の最初の部分に現れる河は、むしろ生命そのものに潜む底知れぬ激しさと、それに由来する神々しさを強く感じさせる河である。

「ライン」は、1801年当時滞在していたハウプトヴィルで構想され、一度改稿されて現在の形になった。ヘルダーリンは、この地で毎日のように目の当たりにしたアルプスの峰々、「この永遠の山脈¹⁾」の偉容に消しがたい影響を与えられたが、上述のラインの荒々しくも神々しい形象も、この頃成立した「帰郷」や「さすらい」の場合と並んで、その顕著な現れのひとつに数えられる。ヘルダーリンのアルプス体験は、簡単に言うと以下の2つにまとめられると考

* 言語系教育講座

えられる。

彼は当時の手紙に、アルプスを見ていると「母なる大地の若い時代、英雄の時代」,「太古の、生成中のカオス²」を思い出すと述べている。つまり、比較を絶して大きいアルプスの自然は、あらゆる人間的な尺度を越えた自然の元素的力の測り知れなさ、神秘を詩人ヘルダーリンの裡に深く植え込んだのであり、また一方でヘルダーリンは、その絶大なる大きさ、人間の理性や感情、あるいは人間的な時間の幅では決して測れず、理解不能な存在としてのその威容、不思議さゆえに、アルプスを「神」と並べてもいるのである。「神がこの地上に玉座を持つとすれば、それはこの堂々たる峰の上をおいて他にはない³」と、彼は妹宛の手紙で述べている。

つまりアルプス体験は、自然の元素的力と神の存在への直観的確信を彼にもたらしたのであり、それはこの詩人の世界の枠組みを、下方と上方において人間的な規模を遥かに越え出たところまで押し広げ、その世界をますます広く豊かなものにしたといえるのである。そしてそれは、既述のように讃歌「ライン」にも、後述のようにはっきりと窺える事実である。

さて「ライン」にはこの河のこのことのみならず、多様なテーマがうたい込まれているが、この作品の第一の魅力は何と云っても、荒々しくも雄々しいこの河が、いくつかの曲折を示しながら、ヨーロッパ中央の広大な地域をゆったりと流れるに至るそのさまがありありと眼前に浮かんでくる感のあることであろう。ラインの流れはここでは、現実のこの河をめぐる地理的な事実とぴったりと対応する形で正確に記述されている。だがローマノ・グアルディーニの言うように、ラインはここでは「たいそう正確に地理学的に観察された実際の河でありながら、しかし同時にそれは《半神》なので」あり、その結果ここに現出するものは雄大な「神話的風景⁴」なのである。グアルディーニによれば、ヘルダーリンにおける自然の本質は、「経験的な現実性 (Realität) と宗教的な体験において感得される聖なるものの両者により特徴づけられている⁵」のであり、このような二重性こそが、この詩におけるラインの姿の不思議な魅力の源であると、筆者も捕らえる。

では現実のラインはいかなる河か、ここで簡単にその流れを辿ってみよう。ライン河は、スイスアルプスの東部、標高約 3000m のゴツタルト山塊が水源であり、その後この山地を東に向って約 68km 流れ (前ライン)、ライヒナウ近辺でアドゥーラ氷河の水を受けて発した後ラインと合流し、向きを北に変えリヒテンシュタインとスイス、及びオーストリアとスイスの国境を流れてボーデン湖に注ぐ (アルプスライン)。ボーデン湖からは真西にバーゼルに向い (高ライン)、途中湖から約 20km はなれたシャッフハウゼンで幅 150m 落差 21m の滝 (ラインファル = Rheinfall) となる。バーゼルからは北に向きを変えて北上し (上ライン)、カールスルーエまではドイツとフランスの国境を走る。カールスルーエからは、マンハイム、マインツ、コブレンツ、ボン、ケルン、デュッセルドルフとドイツ西部の主な都市を通過し、マインツからはやや西方に向きを変え (中ライン)、ボンの下方で低ラインとなり、北西に向きを変えオランダを通り北海に至る。全長 1320km、流域地帯 252000 平方キロメートルの、ドイツ国内だけでもネッカー河、マイン河、モーゼル河など多くの支流を擁するドイツ最長の河である。

以上のようにほんの概略、その行程を辿っただけでも、3000m の高さのその源から、山地や峡谷を抜け、東へ、西へ、湖を通り、そして北へと大陸を流れ進むこの大河の長旅は、われわれの想像力を刺激して止まないものがある。古くから「父なるライン」が数多くの酒歌や詩にうたわれ、敬愛されてきたのも当然のことと思われる⁶。ちなみに 18 歳の若いヘルダーリンも生まれて始めてライン河を見て、まことに新鮮かつ深い驚きの感情を覚えて、それを以下

のように母への手紙に綴っている。

目の前の光景を見てはくは自分が生まれ変わったかのように感じました。・・・考えても見てください、堂々たる、ゆったりしたラインが、船の姿がまだよく見えないくらいの遠くからやってきて、青い壁と見紛うばかりの彼方へと流れ去ってゆくのです。対岸には深い野生的な森がかぶさり、その上方にはハイデルベルクの山々⁷。

若いヘルダーリンが見たのはカールスルーエから 50km ほど北上したシュパイア近辺の、落差の少ない平地をゆったり流れる上ライン（Oberrhein）であったと思われる。

さて上記のようなライン河は、この詩においてはいかに現れるか。若いラインは第 2 詩節において以下のように詩の中に登場する。

しかし今この山稜の中、
 白銀の頂きのはるか下を
 うらかな緑のその下を
 森は身をふるわせ、
 岩は頭を寄せあつて、
 見下ろしていた、そこに終日^{ひねもす}
 その冷たい谷底で
 私は聞いたのだ、救済を嘆き求める
 若者の声を。荒れ狂い、
 母なる大地を糾弾し、
 父なる雷神をも非難する声聞き、
 死すべき人間は両親^{ふたおや}に同情しつつ、
 その場から逃げた、
 恐ろしかったからだ、光もなく
 桎梏に囚われて身をよじり、
 狂乱する半神の姿は。⁸

たけり狂う若者を見て「身をふるわせて」いる岩や、山稜は、ラインの水源地ゴットタルトの山々であり、水源のラインは誕生間もない「若者」とみなされているのである。まさに神話的風景がここに展開されている。そしてこの若者が、「桎梏に囚われている」とは、高山の氷がラインを閉ざし、その進行を阻んでいることと受け取れる。それにより「流れる」という本来の営みを妨げられているゆえに、若者ラインは嘆き、荒れ狂うのである。その嘆き、糾弾の声が、並外れて大きく、普通の人間は逃げてしまうということが、すでにして若者の存在の尋常ならざる来歴を物語っているのである。このすぎましい咆哮ぶりは、第 5 詩節に描かれるこの桎梏を逃れて、周囲の森や大地もなぎ倒し、割らんばかりの勢いで疾走するラインの荒々しさと並んで、まさに元素的な自然の途方もない力をわれわれに提示しているのである。そしていかなる躊躇や逡巡もなく、己の内部から突き上げる力に何の恐れもなく身をゆだねるこのような荒々しさは、またいかにも潔い荒々しさともいふべきものであり、ラインがこの詩において

冠せられている形容詞「高貴な」、そして「自由に生まれついた」の由縁のものと思われる。ビンダーは、ラインは「誕生のときから雅量あるものとして示されているゆえに高貴である」と述べ、「ゴットアルトという自由な山稜で生まれたから、自由に生まれついた⁹⁾」と語っているが、それが、山岳地帯を流れる川の、上述のような意味での潔さ、奔放さのイメージによって支えられていることを指摘しなければ、十分な言説であるとは言い得ないであろう。続く第3詩節では、この「高貴」で「自由に生まれついた」のラインについて、以下のように語られる。

そして彼(=ライン)は山上の兄弟たちとは別のことを望んだ、
あのテッシン河とローダヌス河とは。
彼は別れを告げると出発した、性急に
アジアへと王者の魂は彼を駆り立てた。¹⁰⁾

テッシン河とローダヌス河はともにゴットアルト山塊に水源を持つ2つの河であり、同じ山中に生まれている故にラインの「山上の兄弟たち」なのである。テッシン河はゴットアルト山塊を離れると南東に向かい、マッジョーレ湖を通過してロンバルディア平野を南下してポー河に注ぐイタリアの川であり、ローダヌスはフランス名をローヌ河と称し、ゴットアルトから西南に向かいレマン湖を通りフランスのリヨンでローヌ・サオヌ・ゼンケ川に合流し南下するスイスとフランスの川である。ここでこの2つの河についてこのような形で言及されていることの意味は大きい。2つともに地理的事実に沿いながら、このほんのわずかな言及によって、ラインをめぐるこの物語の枠を、後述のように西と南に大きく広げる働きをしているのである。つまりこれもここに展開される「神話的風景」を支える大事な要素のひとつなのである。

さてこのように南と西に向かう兄弟たちに対して、ラインは「アジアへと駆り立て」られた、すなわち東に向かう。これは、既述のラインの現実の流れでいえば、ゴットアルトを抜けたライン(前ライン)が、ライヒナウ近辺まで約68kmの山峡を東に向けて流れていく地理的事実に対応している。ラインの、全体から見ればほんのわずかの東に向かうこの動きを、ヘルダーリンが殊更とり上げ、西や南に向かう2つの他の河に対して思い入れ強く語るのは、もちろんヘルダーリンの東方、つまりギリシャへの深い思いがあるからに他ならない。特に「ライン」が成立した頃のヘルダーリンは、ギリシャについて一段と独特で深い洞察に達していたことは、ベーレンドルフ宛の書簡が如実にわれわれに示すところである。この手紙が実際に名宛人に出されたのは、「ライン」が構想されたであろう時よりも数ヶ月後であるが、この頃この独自のギリシャ観は既に彼の胸中で形をなしていたと思われる。

ここにおいてヘルダーリンは、ギリシャ人の本性は「天の火」、すなわち情熱であり生命性であると述べている。ホーマー的な沈着、冷静が彼らの特徴と見えるのは、この卓越した人々が自分たちに欠けている「西欧的なユーノーの冷静」を自ら獲得し、「異質なものをわが物とした」からであると。われわれは従って、ギリシャ人においてその本性である「天の火」のみならず、われわれのものである筈の「冷静」をも学ばなければならない。なぜなら、「本来のもの、民族のものは、われわれの自己形成の過程においてその優位性をどんどん失っていく」からなのである。従って「本来のものも、異質のものと同じく、学ばねばならない¹¹⁾」のである。

ラインのほんのわずかの東への行程を、ヘルダーリンはここで、実に意味深いものとして、

詩的に神話的に捉えなおしているといえるだろう。この東への行程は、われわれ、つまり西欧人にとって本来のものも生かし、かつ異質なものを、すなわちギリシャの特性である「天の火」をも獲得するための、まことに大事な一過程なのである。まさに西欧の河であるラインが、「性急に / アジアへと駆り立て」られるということは、自らにとって何がもっとも価値あることかを本能的に洞察しえる「王者の魂」をラインがその裡に抱いていることの証なのである。したがって、同じく西欧の河であるテッシン、ロダヌスが、すぐに南に、あるいは西に向かったに対して、若いラインがまずひたすら東に向かおうとするその意欲を、詩人は殊更選別し、称揚するのである。しかしそれにしても若者ラインのこの意欲には実に激しいものがある。

それゆえその言葉は雄叫びの声
 他の子らのように、むつきに包まれて
 泣くなどは好まない、
 なぜなら、岸辺が、曲がりくねった岸辺が
 まず最初にその側に寄り添い
 貪欲にこの河にからみつき
 おのれの齒にくわえ、
 うまく保護しようとしたとて、
 高笑いしながら彼（＝ライン）は、この蛇どもを引き裂き
 その獲物ともども突進し、そしてもし
 力ある山の霊が急いで彼を抑えず、
 野放図につけ上がらせたら、電光石火
 彼は大地をうち割り、そして魔法をかけられたように
 森たちもその後を追ひ、山もろとも崩れ落ちたろう。¹²

以上第5詩節は、前ラインがその進路を北に変える直前あたりで、急勾配の山地をものすごい勢いで流れてゆくさまを描いているのであり、それが、東に直進しようとする半神ラインの真直ぐな意志と、何とかそれを押しとどめ、穏やかに北に向かわせようとする周囲の諸々の力との闘争という神話的風景として見事に命を与えられているのである。ラインに寄り添ってくる「曲がりくねった岸辺」を蛇に見立て、ラインが不敵にもそれを「引き裂く」という件は、ヘラクレス神話からの連想である。ヘラクレスは周知の如く、ゼウスとテーバイ王アンフィトリオンの妻アルクメーネとの間に生まれた怪力の英雄であるが、ゼウスの妻ヘラが嫉妬のあまり、ゆりかごのヘラクレスに蛇を送って殺そうとしたところ、赤ん坊のヘラクレスはこの蛇をずたずたに引きちぎって殺してしまったと、伝えられている。ここで、神と人の子、つまり半神の英雄ヘラクレスになぞられているラインとは、つまりやはり「半神」であるということになる。

さてこのように荒々しく東に向かおうとした「半神」は、宥められ撓められて北に向かい、そしてついにはドイツ西部の平地を北上して、まさに西欧の地の真ん中を流れて北海に注ぐ。この地理的事実を、詩人はいかにその詩の中に取り込み、命を吹き込んだか、これをうたった6詩節において見てみよう。

だが神は倉卒の生を息子らに
 与えようとはしない、もしも
 奔放に、だが聖なるアルプスに阻まれて、
 ラインのように、多くの川が谷底で
 いきり立つと、それを微笑んで見やるのだ。
 このような焔において、だが
 すべての純なるものは、鍛えられる。
 そして彼がその後、山岳地帯を離れて、
 ドイツの国土を静かに流れ、
 満ち足りて、よき営みのうちに
 憧れを鎮め、国土を耕すのは
 美しい眺めだ。父なるラインは
 自ら築いた都市^{うち}の中に
 愛する子らを養う。¹³

たぎり立つようなアジアへの激しい想いは、強固な巖に当たってはね返され、そしてまたはね返される。そのような過程のうちに怒りは鎮められ、若い河は鍛え直される。人間の規模をはるかに逸脱した元素的な自然の途方もない力につき動かされるのも英雄であれば、自らをはるかに超える存在にいち早く感応し、その声や指令に率直に雄々しく従うのも英雄なのである。神が息子たちの怒りを、「微笑みながら見やる」という言葉は、ビンダーの言うように、この神の絶対的優位性を示しているのである。なぜなら、「神々は、先の見通しのない自分たちの子どもらよりも、自分のほうが物事をよくわきまえているときに微笑む」からである。そして東への憧れを胸に抱えながらも、ここでラインは自己をはるかに超える存在の要請に潔く従い、己の分に、すなわち西欧の河であるというその出自に立ち返る。故郷への回帰である。そして山岳地帯を後にしたラインは、落差のほとんどないヨーロッパ中部の平野を蛇行しつつ、兩岸の野には多くの堆積物や湿気を運び、この地を肥やし耕しつつ、今や「静かに」そして「満ち足りて」流れるのである。若いヘルダーリンが感動して見つめたマインツ、あるいはシュパイアー辺りの「堂々とした、ゆったりした」上ラインもこのような姿であったかもしれない。ここで言われているラインの「愛する子ら」、すなわち「自ら築いた都市」とは、ドイツ西部のライン沿岸に点在する既述の名だたる町々、つまり、マンハイム、マインツ、ケルンなどを指していることはいうまでもない。

ひたすら東を目指していた荒ぶる半神、若者ラインはここにおいて成熟したラインとなる。つまり何人もの子をなす「父なるライン」となるのである。だが若いラインの蛮勇も空しいものではなかった。彼のアジアへの、すなわち「異質なもの」へのあのような強い執着こそが、逆に「自身のもの」への意識をはっきりと目覚めさせたのであるからだ。ベーレンドルフ書簡をここに再び引用すれば、「だが自身のものも、異質のものと同じく、学ばれねばならない。だからこそわれわれにとりギリシャ人たちは不可欠なのである。¹⁴」

さて以上のようにして、讃歌「ライン」を読むと、アルプスに発して1320kmの遠路を旅するこの大河の流れが、地理的事実に正確に即しながら、しかし同時にまことに気宇壮大な「英雄誕生伝説¹⁵」の輝きを帯びながら浮かび上がってくる。繰り返して言えば、これがこの詩

作品の第一の魅力なのである。さらにラインの水路ばかりでなく、既述のように、テッシン川とローダヌス河がラインの「兄弟たち」としてこの詩の中に呼び出されることにより、アルプスを中心とするヨーロッパ中央の地理的情景が、ラインの流域のみならず南に向かうテッシンのそれと、西に向かうローダヌスのそれの分だけ南と西に大きく弧を広げられて眼前に広がるような爽快感がある。それは恰も、われわれ自身が神の目をもってして、この光景を天から眺め下ろしているかのような爽快感であるということもここに付け加えたい。

2

さてこの長大な詩にうたわれているのは、上述の「ラインの物語」のみではない。既述のようにラインは「半神」といわれている。つまり彼は、天なる父と母なる大地の息子であり、神の世界と人間の世界の間の存在、両方の世界の属性を受け継いでいる存在である。このような意味で彼は、神の世界と人間のそれとの媒介者、仲介者であり、つまりは、彼のような「半神」の地上における存在により、われわれ人間は、直接的にはほとんど知りえない神の世界の事情を垣間見ることが出来る、というのがヘルダーリン独特の詩的な世界解釈である。

そしてヘルダーリンによれば、「詩人」という存在もこの「半神」と同じく、神と人間の世界の媒介者である。詩人は、その想像力を最大限に働かせて神の世界に思いを馳せ、それを歌によって人々に伝えるのをその使命とする存在である。半神がその破天荒な行動によって神の世界を人間に示すとすれば、詩人は言葉によって神の世界を人々に伝えるということである。そして讃歌「ライン」においては、詩人についても多くの言葉と思索が費やされている。

さて、「森の入り口の暗い常春藤の中に / 私は座っていた」と、第1詩節第1行目でこの讃歌「ライン」の口火を切る「私」とは、そもそも詩人である。つまり常春藤は、ビンダーによればディオニソス神の持ち物であり、詩人のシンボルなのである¹⁶。しかもこの詩行はさらに、その「私」の眼前で「黄金に輝く昼が / 泉を尋ねてアルプスの階を降りてきた」と続くのである。つまり「私」は、天がこの地上に降り立つのを目撃したということなのである。そしてそもそも彼の座るこの山中、アルプスは、この詩においては神の領域、つまりヘルダーリン自身がかつて妹宛の手紙で使った言葉を今再び使えば、まさに「神がこの地上で玉座をもつ」場所として措定されている。つまりこの詩においては、それは「神々が築いた / 天の砦」であり、「その城の中では今なお / 秘密の裁定が下されて / 人々に伝えられる¹⁷」とうたわれているのである。

そしてこのような場、神がこの世に降り立ってくる場所、神と大地が出会う場所、つまり神と人間の生が仲介されうる場に同席しうるものは現身の人間としては、既述の如く神と人間の間の言葉による媒介者たる「詩人」のみなのである。それ以外の、普通の人間にとっては、神の与える充実、あるいは幸福とはあまりに強烈であり、生身の人間として決して耐えられるものではない、というのがヘルダーリンの捕らえ方である。普通の人間を「焼き焦がし」てしまう「父の純粋な光芒」を、詩人は「頭もあらわに真直ぐ立ち」、その光を「素手に捉え、 / この天上の贈り物を人々に / 歌でくるんで手渡すこと」が、その仕事であると、たとえば、「恰も祭りの日のように¹⁸」においてヘルダーリンはうたっている。

さてこのようにして、聖なる神の砦アルプスにおいて、半神である若いラインの運命を目撃する「私」とは、まさに詩人以外の何者でもないということになる。では詩人の存在について、

この作品ではいかなることが語られているのか、以下に簡単に見てみる。第8詩節では以下のようにうたわれている。

しかし神々は自らの
 不死たることに飽きあきして、それ故天の者らは
 ある物を必要とするのだ。
 それは英雄たちや人間、
 その他の死すべき者ら。何故ならば
 天のものたちは自らは何も感じることはない故に、
 このようなことを語るのが許されるとすれば、
 神々の名において共感しつつ
 ある別の者が恐らくは感じねばならないのだ、
 そのものを彼らは必要としている、だが彼らの裁きは、
 その者は自らの家を破壊し、
 そして愛するものを敵の如くに
 叱咤し、自らの父や子供を
 瓦礫の下に葬り去ろうというものなのだ、
 もしもその一人が、彼らの如くあろうとし、そして
 その狂信者が同じでないことに耐えようとしないならば。¹⁹

ヘルダーリンにおいて、神は、欠けるところのない完璧と充足をその属性とする。「ヒュペリオンの運命の歌」の第2節においては、神々は「慎ましい蕾の中で／その精神は／永遠に花咲き、／浄福の眼は／静かな永遠の明晰を湛えて／輝いている²⁰」とうたわれている。このような永遠の明晰と充実した生命性においては、何かを感じる必要性も必然性も生まれ得ないし、それを他に伝えねばならぬ欲求も生じ得ない。まさに「天の者たちは自らは何も感じることはない」のである。有限な存在であり、かつ限定された意識しか持ちえず、それゆえ自己自身とそれに対置される他者、すなわち世界を意識する人間のみが、「感じる」のである。そして人間のうちでも特に「感じる」存在である詩人が、「神々の名において共感しつつ／・・・感じねばならない」のである。詩人はいわば、感じるということにおける神の代理人であり、それを自らの「歌にくるんで人々に手渡す」使命を持つ存在である。それにより、神々と人間たちの間の媒介者なのである。

ここで注意したいことは、この詩において以上のような詩人の仕事について語られるときの極めて控え目なものの言い方である。神々の代理人として誰かが「感じねばならないのだ」と語るとき、それに先行して「このようなことを語るのが許されるとすれば」という極めて慎重な留保がつくし、その事柄自体を語るときも「恐らく感じねばならないと、断定を避けて形のうえでは推量の副詞が添えられている。そして何よりもここでは詩人という言葉は一切使われず、それが意味されていることは歴然としているにも拘らず、神々は「ある物を必要とする」、或いは「ある別の者が・・・」と極めてへりくだった、慎重な言い方をしているのである（傍点筆者）。

それは神々に代わって「感じる」という仕事を託された詩人の陥りがちな罠、誘惑に対抗す

るために幾重にも張られた自身に対する用心、前もっての戒めであるといえよう。ここに読み取れるものは、崇高な神々の世界を「共感しつつ感じる」ことにより、そしてそれへの強い憧れと熱狂のあまり、自分自身をもつには神々と並ぶもの、等しいものと思ってしまうこと、つまりは詩人の「傲慢」(Hybris)の罪への恐れであり、深い自覚であると言ってよいであろう。現身の恋人ゼウスをどうしても一目みたいと願い、そしてそれを見たということだけで、人間の娘セメレは直ちに雷に打たれ、死んだ。ましてや人間の身で自らを神々と等しいと思ひなしたとき、神々はその不遜を容赦なく打ち砕くのである。これがヘルダーリンの詩作品にしばしば見受けられる詩人の「傲慢」である。特に先に引用した「恰も祭りの日の如くに」の、中断された第8詩節に見られるそれは、われわれの心を痛ましくも打つものがある。ここで詩人は、文字通り恰も神々の国がこの地上に実現したかの、雷雨明けの輝く農村の朝の情景を高らかにうたうのだが、その未完の最終詩節は以下のように中断されているのである。

そして私はすぐに、
天上の者らを見るために、私は近づいたと
語るが、彼らは、彼ら自身が私を、偽りの司祭と
人間たちの間でも最も下位の暗闇のなかへと投げ落とす、²¹

日常の生の規範をはるかに超越する神々の世界の充実を語ることが託されている詩人には、当然のこととしてその日常のレベルを超える精神の高揚と集中が要求される。そしてここに紡ぎだされる言葉が単なる自己満足、熱狂者の単なる絵空事に終わらぬためには、耐えざる厳しい内省が求められよう。もしほんの一瞬でも、自己の力を過信し、神々と等しい者と自ら思ひなせば、そこに発せられる言葉は、いかなる根拠も欠いた、虚しい大言壮語に墮してしまう筈である。このような詩人の「傲慢」について作品中でしばしば言及されているということは、ヘルダーリンが詩人の使命というものをいかに重く深く受け止めているか、いかに誠実にそれについて考えているかの何よりももの証であるといえる。

ここで讃歌「ライン」に戻れば、このような傲岸に詩人がもし陥れば、「家」も「愛する者」も「父も子供」も破滅させられてしまう、と第8詩節ではその生半可ではない恐ろしい結果を、詩人自らが語っているのである。

だが傲岸という罪に陥らないまでも、日常の生の規範をまったく超越する神々の世界をうたうことは、日常の生が普通の人々に与える慎ましい喜びと落ち着きを、詩人の生から限りなく遠ざけるということがある。その結果、ヘルダーリンの作品には、これらの限定された己の境涯に甘んじ、慎ましく、しかし心豊かに生きる市井の人々の生が、そのような生を拒まれ、その圏外に在る者、すなわちまさに詩人の目により、逆にまことに陰影深く描き出されるということがある。「夕べの幻想」に登場する農夫や町の人々、「わが持分」で詩人がその庵を出て散歩する途上に見かける野良仕事に勤しむ人々、「パンと葡萄酒」第1詩節に描かれる一日の仕事を終えて活気づく夕方の市場の人々の様子などが思い起こされる。

これらの場面が独特の陰影と一種の懐かしさに満ちた見事な情景描写となり得ているのは、これを描く詩人がこのような生の場の全く圏外にいて、遠く、高い視点から、恰も神の視点からのように、これらを眺め、語っているからなのである。日常の生の現実に付随するあらゆる卑近な関連性を断ち切ったこのような視点からこそ、われわれ自身がほとんど気のつくことが

ない、大地に縛られたわれわれの生の限定されている故のまことの慎ましき、しかしまた限定されているからこそその限りなく豊かな生の姿が、浮き彫りにされてくるのである。詩人であるということはヘルダーリンにおいては、このような「慎ましくも豊かな生」から自身は、永遠に拒まれているということであり、しかし同時にそれは、この「慎ましくも豊かな生」の真の意味を誰よりも深く理解し、表現しえるということなのである。これもひとつの詩人の運命といえよう。

讃歌「ライン」においても、詩人の存在についてうたった上述の第8詩節に続いて第9詩節では、詩人の視線はこのような大地に縛られた生に向い、そしてその慎ましい運命を今やしみじみと祝福するのである。

それ故に、慎ましい運命を
見出した者は幸いなれ、
そこでは確かな岸辺においても
今なお彷徨と苦悩の思い出が、
甘くざわめき昇るとも、
彼は誕生の折りに神が
定めた居住の地の
境界の範囲を
喜んで見て回り、
そして休息する、慎ましく幸福を味わいながら。
彼が望んだすべて、天上的なものは、
おのずからのように、
今や、この休息する勇者を、
微笑みながら、包み込んでいる。²²

冒頭の「それ故に・・幸いなれ」における「それ故に」という接続詞は、これからうたわれる者の至福に満ちた生と前節でうたわれた休息も与えられぬ詩人の苛烈なそれとの対比において言われているのである。そしてこの者の「神が／定めた居住の地」が、また「確かな岸辺」（傍点筆者）とも呼ばれており、この者が最後には「勇者」と呼ばれていることから、この者は第6詩節でうたわれる「父なるライン」と当然重なってくる。自らの大地の子としての運命に従順に従い、大地を潤し耕しそして子をなして成熟したラインの姿が、ここで再び地上の「勇者」としてわれわれの前に現れるのである。

3

さて以上のような「半神」、「詩人」の具体的な例として、第10詩節ではルソーの名が呼び出される。フランス革命を思想的に準備したといわれるこのスイス出身の大思想家をヘルダーリンは、手塚富雄の言い方に倣えば、「人の世の最もよい、もっとも美しいあり方を憧憬してやまぬ者²³」として、何よりもまず言葉の真の意味での「詩人」として捉えたかったということである。そして、そのような「憧憬」はまた、ヘルダーリン自身を終生駆り立ててやまなかつ

たものでもあったということも、ここに付け加えておきたい。

以下においては、第10・11詩節で語られるこのルソー＝詩人において、ヘルダーリンにとっての詩人の意味をもう一度簡単に検証し、ついでそのルソー＝詩人、そしてヘルダーリン自身が希求した理想の世界がいかなるものであったかを、第13,14詩節で語られる神々と人間の宥和の場面において考察して、この論を終わりたい。

さて10詩節のルソー（＝詩人）とは、「不屈の魂」と「確かな感覚」の持ち主、そして己の裡に「満ち溢れる聖なるもの」によりそれが語りだすと、そこには「さながら酒神のように愚かしくも神々しく、／そして掟を無視して純粋な言葉が伝えられる」とうたわれる。ここでオリンポスの主神ゼウスではなく、「酒神」、つまりバックスが引き合いに出されているのは、「純粋な言葉」（つまり真の意味での詩の言葉といえよう）が、ゼウスが代表する知性や秩序に基づく真理ではなく、感覚や直感に基づく、もっと広く自然をも取り込んだ形での生命ある真理を意味しているからであると思われる。小賢しい配慮や日常的思惑を一切欠くその言葉は、従ってまた日常の生の規範や習慣から見れば、まことに「愚かしく」、かつ「掟を無視し」たものとなる。そのようないわば破天荒な「言葉」であるからこそ、だがそれは人間の世界にまだ誰も考えもせず、感じもしなかった新たな光を持ち込むことが可能なのであり、それ故その言葉はまた「神々しい」とも言われてもいるのである。

このような「愚かしくも神々しい」言葉は、たとえ少数の「心よき者には理解される」としても、大半の人々には理解もされず受け入れもされないのが必定であろう。それ故彼は、ここでは「異形の人^{いぎよう}」と呼ばれるのである。「そのような異形の人を、私はなんと名づけよう？²⁴」——これがこの第10詩節の最後の1行である。

さらに一言付け加えれば、「異形の人」の上述の孤独は、彼が他を拒絶することに由来するのではなく、第11詩節の言葉によれば、むしろそれは「すべてを愛し」かつ「すべてを受け入れる」彼の本性に由来するという、注目すべきパラドクスがある。この途方もない愛と受容性が、彼をして「天さえもその双肩に背負わせる」、すなわち神々の世界についての「愚かしくも神々しい」真理を彼は逸早く感知し、それを人々に伝えるのである。しかし神の世界にも限りなく接近することになるそのような仕事は、「死すべき人間」であるこの詩人自身が、われに返ってみれば、「愕然として恐れ戦く」体のものである。ましてや他の人々の理解を得ることはほとんど不可能であろう。そして彼はこの地上における「異形の者」となり、孤独者となる。第11詩節において、人々から「忘れ去られ」、静かな「森の影の中」の「ビーラー湖畔の新鮮な緑のなか²⁵」の孤独なルソーが語られるのは、このような詩人をめぐる事情として捉えられているのであり、実際ルソーは、あまりに先鋭的なその著作が誤解を呼び、一時スイスのサン・ピエール島に難を逃れざるを得なかったのである。

さてルソーについては、まだ様々なことが歌われているのだが、本稿では以上で終わることとし、最後にその亡命者ルソーが、孤独な昼寝から目覚め、島の「夕方、やわらいだ陽の光に向って足を運んだ²⁶」一瞬、彼の眼前に立ち現れたヴィジョン、つまり第13詩節描くところの神々と人々の宥和の情景において、ルソー＝詩人＝ヘルダーリン自身が求めてやまなかった理想の世界とは何かを考察したい。

このとき、人々と神々は婚礼の祭りを祝う。

生きとし生けるものすべてが祝う。

そしてしばしの間、運命の緊張は
 調整されるのだ。
 逃亡者らは宿を見出し、
 勇者も甘美な眠りを求める、
 愛し合う者らは、しかしながら、
 いつもと変わることなく、我が家にある。
 そこでは花々が、無事の
 輝きを放ち、小暗い木々の周りを
 霊がざわめく。だが敵対していた者らは、
 すぐに変容して、急いで
 互いに手を差し出しあう。
 この喜ばしい光が沈んでゆき、
 そして夜が来る前に。²⁷

平和と崇高に満ちた場面である。「愛し合う者らは、・・・いつもと変わることなく」と語られているように、「愛」がこれらすべての要となっていることが分かる。そしてその平和と崇高は、人間のみならず「生きとし生けるもの」すべてに、浸透し輝いているのである。それは、夕方^{いつとき}の一時、穏やかな長い夕陽が地上のすべてをやさしく照らし、そしてそれらすべては、地上のものでありながら、恰も天上の存在であるかのように輝いて見える一瞬のイメージである、といってもよいかも知れない。ヘルダーリンにおいて〈夕方〉は、「さすらい人」や「夕べの幻想」などに見られるように、地上において何がしか天上的なものが成就した一瞬として描かれることが多いのである。だがそれは常に文字通り〈一瞬〉でしかないことも、これらの場面すべてに共通した特徴である。上記の第13詩節においてもそれは例外ではないことは、最後の2行が、さりげなくしかし痛切に表明しているのである。

そして第14節では、既にそのような前提の下に「けれどもこの状態は、何人かの人々にとっては／速やかに過ぎ去ってしまい、他の人々は／もっと長くそれを保持する」と冷静に語られる。詩人は当然、「もっと長くそれを保持している」人であり、「死に至るまで記憶の中に／最良のものを保持することが出来る」人である。さらに続く言葉によれば、「その時彼は、至高の体験を果たし」たのである。そしてこの一瞬である「至高の体験」を唯一の拠り所に、上に述べてきたような生を生きるのが、ヘルダーリンの〈詩人〉であるといえよう。

この作品の最後の15詩節は、作品の副題に〈イサーク・シンクレアへ〉という献辞があるのにちなみ、この友への呼びかけと語りかけの形でうたわれている。シンクレアは自身詩人ではないが、ヘルダーリンの才能をよく理解し、終生変わらぬ深い尊敬と愛情の気持ちをもって、この薄幸の友を支え続けた思想上の盟友である。「鋼におおわれている神が現れようと、あるいは／雲中であろうと君は神を知っている、何故なら／君は善なるものの力を知っているから²⁸」と、ヘルダーリンはこの友に語りかける。神が「鋼におおわれて」いようと、「雲中であろうと」、すなわち世界は紛糾し、暗雲が立ち込めているように見える時にあっても、ヘルダーリンの言う意味での〈神〉の存在を信じ、希望を失わずに前進する人間の力を、ヘルダーリンはこの力強く聡明な友のうちに見ているのである。人間の可能性へのこのような基本的な信頼と希望のうちに、この長大な作品は終わっている。

以上、讃歌「ライン」を、ラインの物語と〈詩人〉の存在、そして第13詩節にうたわれる神々と人々との宥和の場面を中心に見てきたが、結果的にはこの長大な大作のほんの一部について触れえただけに過ぎなかった。たとえば、「純粹に生まれ出たもの」、あるいは「根源」、「運命」など、主として半神ラインにまつわって語られているこれらの事柄について、本稿ではほとんど考察を深めることが出来なかった。また、3つの詩節がひとつのグループ (Partie) をなし、5つ集まって全体を形成しており、したがって全体では15詩節、詩行で言えば252詩行にわたるこの作品の長大な形式とそこに織り込まれた内容との関わりについては、全く触れることは出来なかった。

このような反省を踏まえて、本稿は「ライン」研究の第一歩と考え、上述の事柄も含めてさらに考察を深め、広げていくことを今後の課題としたい。

注

- 1 Hölderlin: Brief an die Schwester, Hauptwil bei St.Gallen d.23.Fbr. 1801, Bd.II S.892
- 2 A.a.O.: Brief an Ch.Landauer, Hauptwil zweite Hälfte Febr. 1801, Bd.II S. 894
- 3 A.a.O.: Brief an die Schwester, Bd. II, S. 892
- 4 Romano Guardini: Form und Sinn der Landschaft in den Dichtungen Hölderlins, Tübingen 1944, S. 43
- 5 A.a.O.: S.44
- 6 vgl. Lothar Kempfer: Vater Rhein zur Geschichte eines Sinnbildes, HJB (Hölderlin Jahrbuch) 19/20,1975/1977, Tübingen 1977
- 7 Hölderlin: Brief an die Mutter, Juni 1788, Bd.II, S. 429
- 8 Hölderlin: Der Rhein An Isaak von Sinklair, Bd. I., S. 342
- 9 Wolfgang Binder: Hölderlins Rhein-Hymne, HJB 19/20, 1975/77, Tübingen 1977 S. 139
- 10 Hölderlin: Rhein, Bd. I, S. 343
- 11 Hölderlin: Brief an C.Böhlendorf, Nürtingen bei Stutgard d.4. Dec. 1801 Bd. II, S. 912
- 12 A.a.O.: Der Rhein, Bd. I, S. 343
- 13 A.a.O., S. 344
- 14 A.a.O.: Brief an Böhlendorf, Bd. I, S.913
- 15 川村二郎：ヘルダーリン詩集，岩波文庫，2002年，東京，解題参照
- 16 Binder: a.a.O., S.137
- 17 Hölderlin: Der Rhein, Bd. I. S. 342
- 18 A.a.O.: Wie wenn am Feiertage, Bd. I. S. 263
- 19 A.a.O.: Der Rhein, S. 345
- 20 A.a.O.: Hyperions Schicksalslied, Bd. I. S. 745
- 21 A.a.O.: Wie wenn am Feiertage, Bd. I. S. 264
- 22 A.a.O.: Der Rhein, Bd.I. S. 345
- 23 手塚富雄：著作集2 ヘルダーリン下，中央公論社，昭和56年，215頁
- 24 Hölderlin: Der Rhein, Bd. I., s. 346
- 25 A.a.O.
- 26 A.a.O.

27 A.a.O., S. 347

28 A.a.O., S. 347

なお、本文中に引用したヘルダーリンの詩の日本語訳については、川村二郎訳「ヘルダーリン詩集」（岩波文庫、2002年）を多くの部分において使わせていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Über Hölderlins Hymne 'Der Rhein'

Nanami HIRANO *

RESÜMEE

Die Hymne 'Der Rhein' war in der Zeit, wo sich Hölderlin in Hauptwil in der Schweiz aufhielt, entworfen. Darin ist, wie im 'gefesselten Strom' der Vorderrhein oder der Alpenrhein geschildert, der in der Gotthardgruppe von den Alpen, der Quelle des Stroms, reißend fließt, vom Alpenerlebnis von Hölderlin in Hauptwil stark beeinflusst.

Doch ist im 'Rhein', dem reizendsten großen Werk, auch der Oberrhein oder Mittelrhein vom eigenartigen Gesichtspunkt ausgedrückt, wie er die Gebirgsgegend verläßt und in der weiten Ebene von Mitteleuropa nämlich Deutschland ganz still und herrlich strömt.

Diese „Rheingeschichte“ ist trotzdem nicht ein einziges Thema vom 'Rhein', sondern ist in der Assoziation dieser Geschichte über verschiedene Sachen darin gesungen.

Diese Abhandlung behandelt die Hymne 'Der Rhein', indem zuerst die Rheingeschichte als Mittelpunkt und dann das Thema vom Dichter und das von der Götterwelt auf der Erde betrachtet wird.

* Division of Languages, Department of Foreign Languages